

カンボジアでの日々



東京経済大学 経営学部 流通マーケティング学科 4年
KEAF-Japap (旧 CEAF TOKYO) 事務局次長

児玉裕史

目次

○Days without limit

カンボジア通信 (KEAF-Japan 発行) 2007年12月号 掲載

○カンボジア滞在時 基本情報

○近い終わりと見えないゴール

同上 2008年6月号掲載

○カンボジアでの日々 第1回 (全4回) ～プロモルプロム校と友好学園

同上 2008年9月号掲載

○カンボジアでの日々 第2回 (全4回) ～プロモルプロム校での日本語の授業

同上 2008年12月号掲載

○カンボジアでの日々 第3回 (全4回) ～フツの1日 平和な1日

同上 2009年3月号掲載

○カンボジアでの日々 第4回 (全4回) ～再会

同上 2009年9月号掲載

○あとがき



Days without limit

カンボジア通信 07 年 12 月号 掲載
(滞在 3 ヶ月目に書かれたものに加筆)

日本人が外国人に外国語で日本語を教えるという事例はいったいどれだけあるのだろう。それが職業上の必要事項でもなく、大学の第 2 外国語でなく、公立の中・高等学校で教えるという事例は。

英語が使えるのならまだしも、僕にとって第三言語であるクメール語（カンボジア語）を使わなければならない。例えるならば、日本でロシア人が日本語を使って日本語人にロシア語を教えるようなものだ。

しかも僕は日本での教師経験もなければ、大学では経営学部にも所属し、マーケティングを専攻している。クメール語の勉強は実質的に出発 1 ヶ月前に始めた。正式に派遣が決まったのは、出発 2 ヶ月前で派遣校が正式に決定したのは、出発 2 週間前なのだから無理もないけれど。

教えるにあたって、別に日本語で日本語を教えても良いだろう。そっちの方がいいという人もいるだろう。英語を使わなくても構わないのかもしれない。けれど、僕が 1 年滞在するプレヴェン州プレスダイ郡にあるプロモルブロム校（中高一貫校）は、今年度日本語の授業が初めての試みなのである。つまり、僕はこの学校の初代日本語教師なのである。

そんな状況下にあって、僕はできるだけ生徒にとって負担にならないように教えたかった。できるだけ、話せるようになってほしいと思っていた。だから、クメール語で教えることは必要条件でありながら、ある部分絶対条件でもあるのだ。

そんな僕がカンボジアに来て「先生」と呼ばれるようになった。つい先日まで日本のどこにでもいるボンクラ大学生だった僕が、プロモルブロム校 952 名の生徒に「先生」と呼ばれているのだ。いや、生徒だけじゃない。先生や村の人々はみな僕をそう見えている。

初めは自分と不釣り合いなその呼び名が「あだ名」のようにしっくり馴染んできたのはつい最近のことだ。生徒の中には僕と同じ 22 歳の者もいる。同じ年齢であっても、傍目から見れば、彼ら・彼女らは生徒であり、僕は先生である。

けれども、授業中果たしてその通りかというところ必ずしもそうではない。クメール語のできない僕にとって日本語の授業の時間は、同時にクメール語の授業になる。むしろ、その時僕は生徒であり、日本語において生徒である彼ら・彼女たちはクメール語の先生になる。中国に「教学相長」という言葉があるが、これほどピッタリな授業風景もないだろう。



授業中の筆者

そして、この光景は授業の中だけに留まらない。職員室での会話、市場での買い物、食堂での食事、ホームステイ先の家族と団欒、近所の子どもたちと遊び…。この場所で起こる日常の 1 コマ、1 コマが、僕にとっての学びの場である。全くクメール語のできなかった僕が 2 冊の本だけを武器に簡単な日常会話から授業に至るまでクメール語が使えるようになってきているのは、まったくもって先生たちおかげなのだ。そして、当然のことながら彼ら・彼女らはカンボジア文化にも詳しい。たいいていの質問は答えてくれる。

また、僕がカンボジア文化に興味を示すように先生や村の人々も不思議なほど日本や日本語に興味を示してくれる。バイクやラジオ、テレビに味の素…。村の人々にとって近くても遠い国だったのに違いない。日本はカンボジア人の描く未来予想図なのかもしれない。

いつも行く食堂では日本語が通じるようになったし、村を歩けば子どもたちが「こんにちは」とか「さようなら」とか声をかけてくれる。

話を授業に戻そう。僕はカンボジアで読み書きよりも聴き話すこと、いわゆるオーラル・コミュニケーションに重点を教えている。日本の高校のオーラル・コミュニケーションのようにひたすら文法をやるわけではない。

読み書きが出来てもなかなか実践する場も少ないし、働くための技能としてもカンボジアでは読み書きよりも聞き話すことの方がまだ需要が高い。そして、僕としては職業の糧としてよりも、日本人が困っているときに、そっと日本語で話しかけてあげられる位でいいと思っている。

また、僕が英語を勉強した経験上、読み書きよりもオーラル・コミュニケーションが出来ていれば、コミュニケーションツールの一つとして使いこなし易いと考えるからである。僕が英語を使えるようになったと実感したのは、試験でいい点数が出たときよりも英語でコミュニケーションとれた時だった。百点よりも一言の伝達なのである。一言よりも二言、

1 分より 10 分話したいという気持ちがやる気を生み出してくれる。

黒板の前より 生徒の方に向けた



だからといって読み書きを何一つ教えないかというと、そういうわけではない。教師の立場から言うと生徒の頭の中だけでは不安なのでノートを取ってもらっている。まだまだ十分ではないが、ペンやノートを全く持っていない（買うことが出来ない）という生徒はほとんどいない。しかしながら、支給されるはずの一般教科の教科書を不十分でほとんどの生徒は持っていない。先生用の指導用教科書も配られないのだから、開いた口がふさがらない。

僕の日本語の授業においては『みんなの日本語』という教科書を使っているのが、村の市場では見かけないので、生徒は買うことが出来ない。そのため、生徒が僕の板書を書き写すことは生徒自ら教科書作りをしていると言っても決して大げさではない。なので、授業の構成、例文・単語の選択は気を使う。『みんなの日本語』は日本で日本語を学ぶ外国人を目的にしていると思われる記述が多く、残念ながらこの村の生活に馴染まない。例えば、バイクでお寺に行くことはあっても、新幹線で神戸に行くことはまず、ない。

板所の字にもかなり気を使う。誤字があっても僕以外気がつくことはないだろうし、へたくそな字を書くと、それが正確な字形だと思われる可能性が高い。ある先生が日本語を少しだけ勉強したことがあって、『さ』の書き方で揉めたことがあった。その先生は、本で文字を勉強していたから、『さ』の二画目と三画目をつなげて書いていた。本来、二画目を撥ね、三画目を移行するはずである。その先生の本を見ると、ワープロの字で書かれていて、それを参考にしていて、そういう書き方になっていた。板書は気をつけねばならない。

漱石は近代の日本語の基礎を作ったと言われる。僕らが現在使う日本語の根底には、漱石がいるのだ。大げさに言えば僕もこの場所で、カンボジアの生徒たちの日本語の基礎を作っているのだ。この事実は今後、やりがいとともに、欠くことのできない緊張感を僕に与え続けていくだろう。

カンボジア滞在 基本情報

0. 滞在期間

2007年9月27日～2008年7月21日

1. 学校紹介

○プレイヴェン州プロモルプロモ中高校

（プノンペンから東へ100キロ、車で3時間弱）

○中高一貫校 07～08年度 952名

○中高20クラスに対し、12教室

7・8年生（中1・2年生）→ 13:00～16:00

9・10年生（中3・高1年生）

→ 7:00～11:00

11年・12年生（高2・3年生 → 午前、午後の全日制

2. 1日のスケジュール（月～土：学校 日：休み）

6:00～7:00 朝の準備・朝食

7:00～11:00 学校

11:00～12:00 昼食（昼休み）

12:00～13:00

プライベートクラス（08年1月～）

13:00～16:00 学校

16:00～20:30 オフ

20:30～ 消灯

3. 村での生活

電気：車用のバッテリー、発電機（夜のみ）

水道：井戸

（お金のある家はポンプで汲み上げて、水瓶に貯めておく）

ガス：プロパン（ネルーン）、

カセットガスコンロ（市場）、薪（市場、自宅）



オフの時間は子どもと遊んでいた

「近い終わりと見えないゴール」 カンボジア通信 08 年 06 月号 掲載

「大学に受かったらプノンペンで飯食おうな。結果出るのは帰国後だけど、また来るしさ」

そう僕が言うと、

「受かってても、お金ないから大学に行けないよ、たぶん」
とプロモプロム 12 年生サイ君は言った。

僕はその後、何も言えなかった。

「お名前は何ですか？」

彼女は僕の顔をチラチラ見ながら、初めて会った日本人に日本語で訊いた。

「僕の名前は…」

そんな、たわいない会話だった。けれど、初対面時の万国共通の始まりの会話。

『彼女』は僕の生徒であり、『初めて会った日本人』とは、カンボジアに初めて来た僕の友人である。

「今年は例年にないくらい物価が上がってるわ。やりくりが大変よ」

そう言うのは、プロモプロムのソッペアック先生（クメール語）。給料は遅延が当たり前。「カンボジアは 1 ヶ月 40 日～50 日なのよ」という言葉は、40 日～50 日のペースで月給が出ることを表している。世界的な物価高騰は僕の村にも訪れている。

それを聞いた数日後、その波は自炊が出来ないため食堂通いの僕にも訪れた。食堂の値段が 0.75 \$ から 1 \$ に上がったのだ。1 日 2 \$ の僕もやりくりが大変だ。



ソッペアック先生(左)、子どものモニークン(真ん中)
旦那でプロモの英語の先生でもあるポーン先生(右)

「児玉さん、もう少ししたらプロモプロムは友好学園よりたくさんの生徒が日本語を話せるようになりますよ」
とは、通訳のソワンさん。

「どうしてですか？」と僕が尋ねると、

「友好学園の最初の頃より、たくさんの生徒が日本語であいさつしてくれました」と言っていた。



いつもお世話になっている通訳のソワンさん

ある日、学校へ行くとチョークがなかった。

「なんでないんすか？」と事務のヒュン先生に訊くと、

「今給料遅れてて先生もお金ないし、備品の予算は買ったあとに貰うんだ。申請してからお金を貰うまでは、時間がかかるんだよ」と言った。

つまり、学校に前もって予算がないのだ。僕は市場にチョークを買いに行った。

こんな風にタメ息と嬉しさが交錯する日々。僕の滞在は 8 ヶ月が経ち、7 月には帰国する。つまり、カンボジアの年度が終わり、それぞれ生徒は卒業したり、進級したりするわけだ。何人かは学校を辞めてしまうだろう。サイのように家の事情で進学を断念せざる者をえないもいるだろう。

僕は現地にいて、いったい何が出来たのだろう。自分が滞在したことに、果たして意味のようなものがあつたのか。

そんな問いが浮かぶ。

そして、それに対する答えが出せない。

そんな時、僕はなんだか居た堪らなくなる。

けれど、今の僕にしか出来ないことがある。

現地にいて、人々と共に生活しながら生まれたことがある。それは確かだ。

日々は淡々と過ぎていく。静かにひっそりと。

カンボジアでの日々 第1回(全4回) ～プロモプロム校と友好学園 カンボジア通信 2008 年9月号掲載

僕は07年10月から08年7月、カンボジアのプレイヴェン州プレアスダイ郡にある、プロモプロム校（以下、プロモ校）に滞在した。

08年7月に帰ってきて、1ヶ月が経ち、現地からの報告とは違った形で、この場をお借りして、現地の状況をお伝えしたい。

もちろん、この中だけで書ききれぬわけもなく、報告会やブログの開設なども予定している。そちらも決まり次第、お伝えしたい。

つまらない前置きはほどほどにして、今回はプロモ校と友好学園の違いについて書いていきたい。

友好学園について知っている人は多いと思う。昨年までCEAF TOKYO（現 KEAF-Japan）の中心的な支援先であり、多くの日本人も訪れている。

しかし、プロモ校についてどれだけの人が知っているのだろうか。いや、友好学園がカンボジアの中でもかなり特殊で、プロモ校がごく一般的なカンボジアの学校であることを頭でなんとなく分かっていても、具体的にはよく分からないのではないのかと思う。

滞在中、僕はそのことを強く感じた。

CEAF TOKYO は昨年、友好学園以外の学校へ支援先を移行したが、団体内・事務局内でも具体的な意味で「支援方法が同じではない」と理解できたのは、ごく最近のことだろう。

過去のカンボジア通信を見直しても（お持ちの方はご覧になってください）、友好学園とその他の学校では支援されるものも違うし、抱えている問題点も違う。もちろん、全部が全部違うということではなく、共通している部分もある。

友好学園とその他学校を比較すると、支援要求の共通領域は小さい。友好学園以外の学校同士はかなりの多くの共通した問題点（学校側の支援要請など）を抱えている。

もちろん、世界はそんなに単純じゃない。友好学園とその他の学校では設立の背景からして違う。けれども友好学園だけを通して見ても、見えない部分がある。

カンボジアのプレイヴェン州プレアスダイ郡には高校が3つある。プロモ校と友好学園とタッコー高校だ。プロモ校と友好学園は3キロしか離れていない。プサートリヤ（クメール語で「ナツメの市場」という意味）を中心にして、ほぼ

同距離にある。僕の住んでいた元郡長さんのお家もその市場に隣接している。ちなみにタッコー高校はプサートリヤからバイクで40分くらいかかる。

プロモ校と友好学園は同じ地域にありながら、まったくと言っていいほど違う。校舎の外観、指定制服の有無、授業時間、カリキュラム……。だいたいチョークからして違う。

それでも、友好学園とプロモ校はかなり密接な関係にある。例えば、兄弟や姉妹の中でどちらかがプロモ校で、どちらかが友好学園なんていうのはよく聞く話だ。また、プロモ校は友好学園からけっこうな人数の先生を借りている。昨年は中学と高校あわせて、14人の先生を借りている。昔、プロモ校で教えていて友好学園に移籍した先生もいる。



プロモ・友好学園の先生と
（筆者は左から4番目）

プロモ校と友好学園の先生もいい関係だ。敵対しているようなことはない。むしろ、すごく友好的で、一緒に party するし、共同生活している人もいる。

最初の頃、僕は誰がプロモ校の先生で、誰が友好学園の先生か分からなかった。それくらいじっくりと双方の学校の先生が馴染んでいた。

だから、僕もその輪の中にうまく入れたことによって、友好学園の先生とも、いい関係を築けた。最初は色々とギクシヤクした部分もあったけれど、彼らは大人だった。よく話しました。夕方にはサッカーもした。夜はお酒も飲んだし、遊びにも連れて行ってもらった。

このあたりは08年3月まで友好学園にいたフロム・サガの小山くんのおかげでもある。僕らは単なる同僚であると同時に、いい友人にもなれた。よく考えてみると、友好学園の独身の先生たちと僕はほとんど年齢の差はない。

プロモ校も友好学園も中高一貫校だ。友好学園には入学時、受験がある。そして、高校からの入学はできない。そもそも、プロモ校には受験というのがない。高校も中学も。つまり、プロモ校の場合、入学希望の生徒は原則的に受け入れなければならない。

プロモ校の場合、と書いたけれども、カンボジアの公立学校ならばどこもそうなのかもしれないと思われる。

カンボジアには中学卒業資格試験と高校卒業資格試験がある。高校の卒業資格試験の合格者は大学への入学資格も持つ。高校入学時必要な条件は、この中学卒業資格試験に合格することだ。

日本でもカンボジアに学校を建てようというのをテレビでやっているが、確かに学校も足りない。内戦が終わったあと、掘っ立て小屋のように建てたものの建て替え（それに替わる校舎）が必要なのも確かだ。また、「カンボジアで全日制を行なう学校はほとんどない」と言われる。「日本とは違うんだよ」と。その理由のいくつかは僕にでも考えられる。

1つは教室の絶対数が足りないこと。例えば、プロモ校には、中高あわせて 20 クラスあるが、教室は 12 室しかない。9・10 年生が午前、7・8 年生は午後。11 年・12 年は一日中という変則的な日程だ。例えば、午前中 9A が午前使った教室を午後 7A が使うという具合だ。だから、中学 1 年生の教室なのに、高校レヴェルの数学の公式の表がペタペタと張ってある。

2つ目は先生の数と給料制度。CEAF TOKYO の支援先である学校を見てみると、「うちは先生が足りてます」ということはほとんどない。誰かしら複数の科目を兼任している。また、給料の仕組みもコマ制だし、その上限もある。

だから、大学をイメージされた方が分かり易いと思う。先生が一日中学校にいることは少ない。もちろん、事務的な作業や試験の採点などの場合は例外だけど、自分の授業が終われば帰る。

先生が来ないことだってある。高校の先生 30 万リエル(75 ドル)。中学校の先生 20 万リエル(50 ドル)。この給料では食べていけない。僕一人が村で生活するだけでも 30 万リエル(75 ドル)近くかかった。

アルバイトはいくつかある。また、たいていは兼業農家なので田植えの時期や収穫期は休みがちになる。これは生徒もそうである。(ちなみに、カンボジアは二期作、三期作というイメージがあるが、僕の村では灌漑設備が未整備で、一期作が多い)

話を戻そう。つまり、全日やるにも教室は足りないし、足りたとしても先生に対する十分な給料が払えていないということだ。その点、友好学園は受験で生徒の数を一定数に出来

るし、すでに十分な教室を持っている。先生の給料の補助もある。

全日制の友好学園だったから、今まで日本語の授業を行なえていた、と言える。ん？では、プロモ校で授業は行なえなかったのか。後任の鳥飼さんも決まっているのに。

さて、今回はプロモ校での日本語の授業について、お伝えしたい。



2 月の村の田園

基本情報

○1 ドル≒4,000 リエル

○カンボジアでは、『中学 1 年生から高校 3 年生』と言わずに、欧米のように『7 年生から 12 年生』と言う。

○プロモ校は 1985 年 中学校開校

2002 年に高校併設

(余談だが、筆者も 1985 年生まれ)



試験の日程を掲示板に書き込む校長と

メモをとる生徒

カンボジアでの日々 第2回(全4回) ～プロモプロモ校での日本語の授業 2008年12月号掲載

今回はプロモプロモ校（以下、プロモ校）での日本語の授業について話していきたい。

時間割のない授業

1年間の滞在中、結局1度も時間割はもらえなかった。その理由は、5コマのカリキュラムに対し7年～11年生は4時間の授業時間しか取れないことが大きい。なぜ、4時間しか授業時間を取れないかは前回の通信に書いたように、教室不足による半日授業によるものだ。

そういった中で、現地に行った当初はどうやって時間を確保するか色々なアイデアを出しては、学校側に提案していた。まずは、空き教室での授業。先生が休んだ（理由は様々だが主に農業やアルバイトのため）時間を借りて授業していた。教えるカリキュラムを立て、授業案を作って教えていた。

はじめは大変だった。こっちが空いていると思って、生徒に「授業する？」と提案して、「OK」が出れば、教室で授業を行なう。授業をしていると、先生がやってきて（たいてい強面）、「なんでオレの時間に授業してるんだ？」と睨まれる。そういうことが何度かあった。

しかし、空き時間を使って授業してるのが職員室で浸透してくると、「あとどれくらいで区切りがつく？」とこちらの様子を察してくれたり、「来週のこの時間は結婚式で休まないといけなから、代わりに授業してくれよ」と代打を頼まれるようになった。

教材のない場所で

カリキュラムや授業内容に関して学校からは「任せるよ」と言われていた。出発前に東京で日本語教師をしてらっしゃる原さんに日本語教授法を教えていただいたが、不安はやはりぬぐえなかった。また、授業で使う言語も悩んだ。日本語か、英語か、クメール語か。

僕としては、日本語や英語の方が授業しやすい。けれど、生徒にとってはどうだろうか。思えば、生徒の視点にどう立つかを考え続けた日々だった。そして、授業でクメール語を使うことにしたのは、生徒視点に立つための重要な出発点だったかもしれない。

「みんなの日本語（教科書）は村でも買えますよ。2ドルくらいです。」と、出発前に友好学園を卒業した生徒から聞いていたが、村には『みんなの日本語』はなく、また2ドルも日本人の考える2ドルではなかった。なにせ、僕の1日の生活費は2ドルだったのだ。

また、一般教科の教科書も不足しているに「日本語の教科書を買って下さい」とも言えなかった。

そういった中で、教科書を使わないとすると、構成に大きく関わる。結局、ポイントを絞った板書を書いて、それを写してもらい、それを变化させてオーラルコミュニケーションを行うことにした。

友好学園から貸してもらえると聞いていた日本語教材も貸してもらえず、教科書と辞書と原さんの教えてくださったノートを中心に授業を作った。

教科書やそれに即した教材が利用できなかったのは、残念だった。しかし、教科書にある日本人にとって身近な単語よりも生徒にとって身近な単語を授業で取り上げることができた。それは教科書がなかったためにスムーズに出来た。

絵を黒板に書いたり、生徒の持ち物を掲げて「これは何ですか？」とやってみたり。

日本からスタッフが来てくださるたびに教材をお願いした。竹口さんは日本語教師もしてらして、的を射た教材を選んでくださった。また、現地の事情を知った原さんからもいただいた。

そうして、環境は徐々に充実していった。



日本から遊びに来てくれた今村くんが
「これは何ですか？」とイスを持って訊いてまわってくれた

授業がない時間

空き時間を利用した授業での問題は、定期的に授業を行えないことだ。クラスによっては週に1回できるのは稀で、2、3週に1回のクラスもあった。授業があろうがなかろうが、僕は毎日学校に行った。始まりから、終わりまで。職員室で授業案を作ったり、先生と話したり、先生に頼まれて、日本語を教えたりした。日記を読み返すと、生徒に授業しているよりも職員室で先生に教えている時間の方が多いときもあった。僕がクメール語の基礎を作ったのもこの時間だ。

また、ずっとポーン先生とソクペアック先生夫妻の子どもモニーくん（2歳）の子守をしていた日もある。

**ボールをもらって
ご満悦のモニーくん**

**人見知り激しく、
はじめ、僕はいつも
泣かれていた**



平日の午前はいいかわらずそんな調子だったが、1ヵ月半を経たころ、午後の7・8年生の各クラスに週1回教えることができるようになった。その時間割も行ったら先生がいることがしばしばあったが、自分の時間を持てることは嬉しかった。

プライベートクラス（塾）

塾についてはやりたいという気持ちがあった。普段のパートタイム授業では興味を持たない生徒もいる。内職していたり、寝ている子もいる。「一生、日本語使わないで関係ないです」と言われたこともある。

そういう子にも興味を持ってもらうことも考えつつ、興味を持っている子を伸ばすには特別な時間を作る必要があった。やる気のある生徒が多いと生徒にとってもいい刺激になるとも思った。

問題点としては、僕自身の準備（授業やクメール語の準備）と他の塾との兼ね合いがあった。生徒たちは7時の学校の前、昼休み、夕方と熱心に塾に行っている。教えているのは友好学園の先生がほとんど。これについても色々な意見があると思われるが、主にテストや試験前に行なわれているものが多い。また、参考書や問題集がほとんどない村では、本での勉強は不可能で、先生に頼らざるを得ないという側面は見逃すことが出来ない。

時間に関しては塾の少ない12時から13時にして、はじめは今までの授業をおさらいから始めることにした。僕の準備もほとんどないし、プロモの先生も受けることになったからだ。

1月の末から始まった塾にははじめは40～60人の生徒が来て、机が足りないほどだった。普段の授業ではまだ扱っ

ていない時間や日にちをやったり、ひらがなを書く練習に時間をかけた。2月には僕の友人も普段授業に引き続いて、塾に参加してくれた。2月の末の中間試験が終わり3月に入ると、生徒は目に見えて減って、10人前後になった。僕としては人数が減った分、一人ひとりの生徒を把握し易くなってホッとしたけれど、ショックな面もあった。

「はじめは僕の塾だって、いっぱい生徒が来た。机や椅子が足りなくなった。1ヶ月も経つと、生徒はほとんど来ない。そういうものなんだよ」

と、先生に言われた。その理由について通訳のソワンさんは「プノンペンにも塾がたくさんありますがそうです。みんな興味は持ってくれど、難しい。簡単には上手にはならない。辞める。また、始める。その繰り返しです」

まるでダイエットそのものだが、その気持ちは分からなくもない。

結局、日本語の塾の方は僕が帰国した7月まで続いた。最後は土曜日もやっていた。生徒は7Aの女の子が7人を中心に、たまに来る子が何人かいた。「どこに行きますか？」とか「市場で魚を買いました」とか『みんなの日本語』の1/3は終わることができた。

日本に帰ってきてから、ふと、クメール語を思い出すことがある。夢に出てくることもある。僕の教えた生徒たちは鳥飼さんが引き続いて、教えてくれている。来年、生徒たちに会った時、どんな会話ができるか楽しみである。



プライベートクラスの様子

カンボジアでの日々 第3回(全4回) ～フツの1日 平和な1日

2009年3月号掲載

第1回(第48号)ではプロモプロモ中・高校の紹介と友好学園の関係、第2回(第49号)では日本語の授業の様子を書いた。今回はカンボジアの食生活について書いていきたい。

辛いのか? 甘いのか?

カンボジア料理と言われて、イメージができるだろうか。隣国のタイやベトナム料理は比較的想像が付きやすい。

タイ料理はトムヤンクンに代表されるように、辛くて酸っぱい、また甘かったりもする。苦手な食べ物がほとんどない私もタイ料理はちょっと抵抗がある。昔、デート相手のリクエストでタイ料理のコースを食べたことがあるが、出る料理出る料理赤くて辛い。ビールで流し込んでも胃がキリキリした。デザートまで赤くないのかとヒヤヒヤした。

ベトナム料理はマイルドな味だが、クセがある。開高健の『ベトナム戦記』の第1章第1節「ベトナムの匂いはすべて“ニョク・ナム”」という小見出しにも登場するニョク・ナム(魚醤)、ベトナム料理がダメになる人が多い理由 No1 のパクチー(香草)は入っていない料理をつけるのが難儀なほど、たいてい入っている。

それに比べると、カンボジア料理はクセが少なくマイルドと言えるだろう。プレイヴェン州はベトナムに近いので、パクチー(クメール語ではチー)も入れるし、ニョクナム(クメール語ではタック・タライ)も使うが、使わない料理も多い。また、唐辛子は胡椒や砂糖とともに、テーブルに置いてある。そんなわけで、カンボジア料理は日本人にとって、比較的食べやすいと思われる。

炭火の炊き立てご飯

朝食は、外で食べるが多かった。これは日本ではちょっと考えにくい。個人的には時間のない朝を簡単にバナナで済ませたい所だが、小さく実の多いバナナは食べきる前にネズミのエサになる。牛乳は 2000 リエルもして、外で食べた方がいい。

朝の市場は1日のうちで一番活気がある。冷蔵庫のない場所だから、買い物客と自転車を引いた農家の人がごったがえしている。時間を追うごとに魚や肉には、ハエがたかり出し、麦わら帽子をかぶった店主は汗を流しながら、それを払う。

そんな市場の片隅ではボーボー(おかゆ)やヌンバンチョク(魚スープかけそうめん)、バンチャエウ(薄皮のお好み焼き)が作られ、1つ 1000 リエルで人々の胃を満たす。昼にはだいたいのお店が終わっているため、朝だけのフードコート。



クイティオ
(米麺の汁そば)



バーイサッチュルーク
(豚肉のせご飯)

食堂でもクイティオ(米麺の汁そば)やバーイサッチュルーク(豚肉のせご飯)などは 2000~3000 リエルの朝食限定メニューが食べられる。

朝の炊き立てのご飯はおいしい。ガスもなく、電気のない村では、薪で焚かれたごはんが朝から食べられる。これをおかずに食べて、学校へと僕は駆け込む。

主菜あれこれ

麺を食べるときには箸が出されるが、たいていスプーンとフォークで食べる。通訳のソワンさんは「早くスプーンとフォークで上手に食べられるようになってください」とアドバイスをくれたが、これがなかなか難しい。箸に苦戦する外国人。日本人は滑稽にそれを見ようと、スプーンとフォークを握る僕はそんな風に見られていたのだろう。

昼食は3~4種類の中から2品を選んで、ご飯がついて 4000 リエル(1ドル)。料理は10時ごろから作られ始める。炒めもの・煮物・スープなど日替わりでメニューは変わる。

食堂では魚よりも肉が多い。しかし、先生の家では魚が多い。この違いは食堂が惣菜屋の役割を果たしているからである。昼食なり夕食を食堂でとっていると、近所の人がおかずを買いに来る。家では安い魚料理。たまにはお外の肉料理。

さて、どんな料理があるかと言えば、もやし炒め・空芯菜炒めなどの野菜炒め(お肉入りで日本のとかわからない)、煮物は豚肉の角煮(これは若い先生が必ず頼む、甘しょっぱい味付け)、スープは蓮の茎と魚、バナナの花とお肉のものがある。

魚は川魚が多く、少し泥臭い。この泥臭さを克服するために、スープにはライムをしぼり、焼き魚には胡椒ベースのタレをつけて食べる。

お肉は基本的にブタ肉が多い。日本では、牛肉・豚肉・鶏肉という順番で安くなるが、僕の村では鶏肉・豚肉・牛肉である。鶏肉はたいてい家で飼っていて、市場ではあまり見ない。お祝いのときには、それを食べる。そのためか、カンボジアのテレビでは鳥インフルエンザ注意のTV コマーシャルが盛んに行われていた。

牛は農業に使われていることもあって、肉は筋肉質で、焼肉はビーフジャーキーのようになる。これでは、ビールには合うがご飯のおかずにはならない。

お肉でいえば、アヒル、ヤギは先生のおうちで食べさせてもらった。食べる文化もないことはないそうだが、犬は食べていない。

カンボジアに限らず、食べ物と言うのはその土地っぽさが表れる。今回は学校の様子とは少し離れてしまったが、生徒や先生たちはこんな風な食生活を送っている。

朝の市場の様子



朝の食堂



食堂の釜



ソペアック先生の手料理(来客辞)



カンボジアでの日々 第4回(全4回) ～再会 2009年9月号掲載

里帰り、そして滞在の意味を見つける旅

僕は07年9月～08年7月までカンボジアのプレイヴェン州プレアスダック郡のプロモルプロモ校で日本語ボランティア教師をした。僕が10ヶ月の滞在を終え、日本へ帰国する前日、プロモ校でお世話になったポーン先生に「お疲れ様、ありがとう」という言葉とともに、終了証をもらった。

1年間終えたことに少しだけホッとした。けれど、何ができたのか、僕以外の人たちにとって僕の滞在が意味のあるものだったかは分からなかった。

「コダマが来て、色んなことが変わったよ。いい方向にね。日本に帰ったら、きっと実感できるよ」とポーン先生は言ってくれた。

しかし、帰国してもなかなか実感ができなかった。就職活動を始めても、就職活動の結果がなかなか出ない。そうすると、カンボジアでの滞在は僕にとっても意味のないことのような気にさえなった。

クメール語（カンボジア語）が出来るより、TOIECでハイスコアをとった方が意味のあるように見えた。実際、オーストラリアやイギリス、アメリカ、カナダなどに留学していた友人は飛躍的にそのスコアをあげていた。そして、彼ら・彼女らは早々に内定先を決めていた。

僕の内定先が決まったのは6月の初めだった。そして、KEAFや周りの方々のサポートもあり、今回の次年度（2009～2010）の奨学生の面接に参加することが出来た。感謝したい。

特に岡宮さんには早い時期から熱心に口説かれた。「オレは児玉くんと行きたいし、児玉くんも里帰りしなくちゃ」という岡宮さんの言葉で、僕も行く決心ができた。

そんなわけで、今回の訪問の個人的な目的は、里帰り（再会）と自分が滞在したその意味を見つけることであった。

雨季のカンボジア

6月22日、夜22過ぎ、僕ら（金子さん、岡宮さん、僕）一行はプノンペンに着いた。約1年ぶりのカンボジア。雨季のカンボジアは梅雨の日本以上に蒸し暑く感じた。住んでいたときは、カラッとした（日本の梅雨ほどジメジメしていない）印象があったから、少し驚いた。

ゲートを出ると、通訳のソワンさん、ワンターさんと再会した。ソワンさん、ワンターさんには滞在中本当にお世話になった。また、会うたびにクメール語やカンボジア文化を教わっていた。最近のカンボジアの天候について、ソワンさんに伺うと、「今年の雨季は雷が多くて、たくさん人が死んでい

ます」と言った。

その言葉は僕を不安にさせた。

僕が教師をしていたときの雨季の出来事。

カンボジアは季節が乾季と雨季の2つに分かれている。12月～4月が乾季で、5月～11月は雨季である。乾季は全然雨が降らず（月に1回降る程度）、雨季はたいてい午後からスコールが降る。日本の梅雨のような朝からぐずった天気は週に1回ぐらいで、基本的にはカラッとしている。しかし、スコールの前はどんよりとした重い雲が太陽を隠し、強い風が吹きはじめ、スコールとともに雷が鳴り響く。

日本でゲリラ豪雨と言われているものはスコールに近い。

ある日の午後、7年生（中1年生）の教室で授業をしていると、雲ゆきがあやしくなってきた。すると、生徒の何人かが「早退させてほしい」と申し出た。屋根あるから、雨の心配はないよなと思ったが、雨が降ると家で農作業があるのかもしれない。そんな風に解釈して、早退を許可した。

雨が降り出すと、生徒だけでなく、他の教室で教えていた先生も授業を止め、一目散に帰宅していった。

なぜ？そんな疑問を先生に訊くと、「雨が降ると、雷は危ないし、あぜ道が通れないんだよ」と教えてくれた。

なるほど。

村には高い建物が無い。雷が本人や雨宿りした木に直撃する可能性は都市よりも高い。それに、生徒の家は田んぼの真ん中にあたりもある。なによりも、アスファルトでない土の道である。十分に整備されていない道では、雨が降るとすぐにぬかるむ。

学校から自転車ですぐの場所に住んでいた僕は、雨が降ってもそういうことに直面する機会が少なかったのも、気がつかなかった。余談だが、私のいた村では雨が降っても傘をささない。レインコートもない。元々、行動範囲がそれほど広くなく、農家を営む人が多いため、必要ないのだろうと思う。市場にはレインコートはあるが、傘は売っていない。

傘のない街。

なんだか映画のタイトルみたいだ。



ネルーン
にあった
AQUOSの
看板

プノンペンの変化、村の変化

到着した時間が夜だったこともあり、プノンペンで1泊した。飛行機でたつぷりと寝たせいか、眠くなく、うとうとする程度だった。

朝起きて、近所を散歩した。月に1回、プノンペンにくると、夕方から夜にかけてこうして散歩をしていた。セントラルマーケットは改装し、僕が帰国する時、建設途中だったビルは完成し、カンボジアの一般定期的なイメージには不釣り合いの近代的なビルになっていた。それでも、市場や朝食を提供する道端の屋台をあいかかわらずで、7時に近づくとバイクや車、自転車にリキリヤの交通量が増し、クラクションが鳴り響く。

世界経済の停滞で海外依存度の高いカンボジアの経済は打撃を受けているだろうが、2004年に10%、2005年に13.4%、2006年には10.4%のカンボジアの経済成長の勢いは、日本と比べ物にならない。

続々と建てられる建物、車の増加、話題となる家電製品の移り変わり（広告や店頭を除くと、プノンペン市民の欲しい家電はエアコンのようである）は、カンボジアが高度の経済成長中の国であることを感じさせる。

プノンペンでフランスパン（フランスパンはカンボジアの田舎の人にとって最高のおみやげ）やクッキーなどのお土産を買って、車は村へ進みだした。ネルーンを超えて、国道1号線を離れ、車が村へ近づくと形容しがたい気持ちになっていった。

僕がいたときと変わらない表情や態度で僕と接してくれるのか。そもそも覚えているのか。そうした緊張と気恥ずかしさが交錯していた。それは同窓会で好きだった女の子に会うときの気持ちに似ているのかもしれない。

車が村に入り、はじめに向かったのは、学校だった。プロモルプロム校。「神の集まる場所」という意味を持つ、僕の生まれた年に開校した学校。僕が約1年過ごした学校。

時間は11時前。生徒や先生は午前の時間を終え、帰り始める頃だ。

学校へ出向くと、校長と副校長になったポーン先生が僕に歩み寄ってくれた。校長と抱き合い、ポーン先生とも抱き合った。生徒や他の先生が「コダマ」と僕の名前を呼んだ。照れくささと喜びが交じり合った再会だった。

「コダマ」以外にも「こんにちは」とか「お元気ですか」という言葉が飛んだ。僕や鳥飼さんがやってき

たことがそんな風に、今につながっている実感が湧いた。

生徒が帰り、先生たちと今後の打ち合わせをした。

昼食は、僕がよく行っていた食堂へ。レストラントゥーン。トゥーンはお父さんの名前で、一家で営んでいる。僕の滞在中に結婚式を挙げた（僕もその結婚式に参加した）娘のティアラのお腹は大きくなっていた。

僕の滞在は下宿という形だったから、滞在中の食事はこのレストランでしていた。クメール語の基本もここで学んだ。もちろん、食事は抜群においしい。以前、カンボジアをともに旅した大学の友人も、カンボジアで一番うまい店と言っていた。僕にとっては母の味である。この日はごはんを3杯たいらげた。

食事後、僕の住んでいた元郡長さん（通称オム — 日本語のおじいちゃんの意味に近い）宅へ。僕の家も、レストランも、この地域（プレアスダック郡）で一番大きい市場の中にある。家に行くと、いつもの柔らかい笑顔で僕を迎えてくれた。

お土産を渡し、世間話をする。今回の旅の目的は「再会」であったが、残念ながら再会できなかった人もいる。

オムの奥さんのオムスライ（日本語でおばあちゃんの意味に近い）が僕の帰国後、亡くなったのだ。僕の滞在中から、病気があることは聞いていたが元気だった。なによりも、屈託のない笑顔としっかり者のオムスライは、ことあるごとに僕を気にかけてくれ、生活についてのあれこれを教えてくれた。家にお客さんが来ると「うちの一番の末の息子」と僕を紹介してくれていた。

オムスライが亡くなった。そう聞いたとき、まったく実感できなかった。

しかし、こうして帰ってくると、残念ながら、その現実がだんだんと認識させられる。オムスライのベッドは長く使われた跡がないのだ。ドアのそばにあったいつもオムスライが使っていたホウキはどこにもない。

オムスライにお線香をあげた。

それでも、まだどこかにいるんじゃないかと思えた。

けれど、オムスライは家の中にも、どこにも、いない。

オムがとつとつと、オムスライが亡くなったときの話しをしてくれた。僕は涙をこらえるのがやっとだった。

オムの家の隣に住むオムの末娘には、2人目の子どもが生まれていた。オムに、オムスライにも新しい孫が生まれたのだ。

そんな風に、僕がいたことに比べ、少しずつ変化していた。僕の周りの変化以外にも、村は変化を遂げていた。市場は改装され、以前のごちゃごちゃした寄席集まった市場から、様変わりを遂げようとしていた。

また、村にはベトナムから電気が入った。自宅へと導く作業は、自分でおこなう必要があるため、いくつかの家庭にしか引かれていないが、大きな変化である。



右からポーン先生、アン先生、筆者、
オムの末娘婿と2人目の赤ちゃん、オムの末娘、オム

奨学生の面接

14時から面接の予定だった。僕らのグループが30分前に着くと、大半の生徒が待っていた。以前僕が教えていた生徒がほとんどだった。近況を聞いたり、冗談を言いあったりしていた。

「スレイネンちゃんは結婚して学校を辞めたの」なんて話も出た。熱心に勉強していたのに、残念だなあと考えた。そして、なによりもう会えないと思うと悲しくなった。

「また、日本語教えて下さい」とか「今回は授業しないの？」という言葉もかけてもらった。

「もう、1年ここにいいことはできないけれど、来年の3月には長く滞在するからそのときにね」と応えた。

自分を待っていてくれる人がいる。すごく嬉しくなった。

面接が始まった。1年前、僕の滞在中にも、奨学生の面接のお手伝いをしたことがあった。そのときはみんな緊張していた。普段、「こんにちは」とか「ありがとう」という挨拶を交わしているのに、全然出来ていない。日本語を教えているときから、教師である僕以外のひとと日本語を交わしてこそ、生徒の自身になり、一つの自立になるという考えを持っていた僕は、そんな生徒の姿に少しがっかりした。

けれど、今思えば見慣れぬ外国人である日本のスタッフを怖がっていたのも知れない。僕がその立場になってみれば、わかる。高校生で奨学金の面接で、相手が外国人で通訳の人がいたら、気軽に「Hello!」なんて言えない。

今年は、「こんにちは」、「ありがとう」というあいさつ言葉が聞かれた。「ありがと、こだま」という言葉には、僕に対する親しみが込められていた。

僕は授業中、「せんせい」と呼ばれていたが、それ以外の場所では「こだま」と呼ばれていた。それに対し、「ちゃんと先生って呼ばれるようにならないといけないよ」とか「先生って呼ばせなさい」という人もいた。だけど、僕は先生という存在でなく、「こだま」という一個人として生徒が接してくれていることを喜んでいて。

面接ではこんなこともあった。11年生のセンくんはサインをひらがなで書き、将来は日本語の通訳になりたいと言った。僕が来たときにはちょっと考えられなかった光景だった。そんなセンくんに、僕のロッカーに入っていた日本語カンボジア語の辞書をあげた。センくんのような生徒がもっと出てきたらいいと思う。日本人が行くことによって、新しい道を知り、生徒がそれを目指す。それは日本語の通訳になる以外でもいいと思う。

その日の夜はポーン先生の家泊まり、夜中まで同僚の先生たちとお酒を飲んで、色々な話しをした。

僕がいた頃の昔話、他の先生の近況、カンボジア国内の話…。話しは夜が深くなっても尽きることはなかった。

次の日(18日)の夜、その日の予定の終わりには、いつものレストランで、プロモの先生たちとpartyをした。普段、夜の飲み会自体珍しいのだが、女の先生たちも来ていたことに驚いた。オム(元郡長さん)を誘うとオムも来てくれた。

総勢18人。滞在は3日目に向かえ、お酒も入り、僕のクメール語の感覚も戻ってきた。普段は真面目な校長先生はお酒が入ると、いつものように陽気になっていった。それは他の先生もかわらない。

20時にはお開きになり、僕らもオムや先生たちもお別れになった。もっと。「また、来いよ」と言われた。

「絶対来るよ」

僕はそう答えた。

こうして僕の里帰りは終わった。たった2日間しか村にはいられなかった。子どもたちとも遊べなかった。それでも、来られてよかった。

僕が滞在した意味はあった。はっきりとそう思えた。

村の人が僕を笑顔で迎えてくれる。建物を建てたわけでもなく、寄付をしたわけでもない。1年、コーヒーやお酒を飲みながら話し、子どもとは走り回っていた。

生徒や先生が僕を歓迎してくれる。学校では、サッカーをしたり、話したり、授業をしていた。授業でいたことが前述したように、つながってきている。

そして、僕が日本にいる以上、日本から彼ら・彼女らにできることをやっていくしかないのだ。

そんな決意が生まれた訪問となった。

あとがき

色々な機会をいただいて、こうして過去に書いたものをまとめてみた。ここに書いてある6編の手記では、まだまだ語りつくせていないことがある。

結婚話の話、食堂の様子、子どもと遊んでいたときのこと、サッカーが上達していったときのこと、雨季のスクールの中部屋の窓から見た風景やその時の気持ち。

この中の6編は、そうした現地で過ごしていたときの自分の生々しい気持ちとは少し距離をもって書いている。まとめたものは改めて眺めると、そう思う。

そのせいか、文章が少々くどい。

それは「うまく言葉に表せない葛藤」として見ていただけると、ありがたい。筆者の筆力のなさもかっこうがつく。

生々しい話しやまだ語られてないことは、僕のブログでも書いているので、問い合わせさせていただきたい。

また、KEAF-JapanのHP内でも伝えていきたい。

最近、「なんでカンボジアに行こうと思ったんですか？」と訊かれる。至極まともな問いだが、僕はうまく答えられない。

それはカンボジアに出発する前から変わっていない。

今でも印象的に思い出されるのは、友人がしてくれた送別会のあとのことだ。

大学のゼミ仲間とお酒を飲んで、朝までカラオケに行った。カラオケが終わって、僕はその仲間の一人である、田原さんと彼の家に向かっていた。

すでに外は明るく、快晴の空、太陽の光は強く僕らをさしはじめていた。セミが鳴き始め、カラスも飛び始めていた。僕らはコンビニでスポーツドリンクを買って、ごくごく飲みながら、たわいもない話しをしていた。

会話が途切れると、ふと田原くんが僕に訊いた。

「そういえばさ、今さらなんだけど、何でカンボジアに行くの？なんか目標とかあるの？」

僕は、たぶんこういうことは当分できないこと（社会人になってからはできないだろう）、現地で住むことの意味、現地に住んだことが何につながるかは不透明だけど、何かにはつながるだろうということ、などを話した。

すると、田原くんは

「なんか最もらしく聞こえるけど、あんまり響かないな」

自分でも明確な目標や目的、意味を感じてきめたカンボジア行きでなかったのは確かだった。

僕は色々話してみたけど、最後まで田原くんは納得した表情を見せなかった。

僕はカンボジアに滞在中によく、なんでカンボジアに来たのだろうと考えた。ちょっと実家に帰るのとはぜんぜん違う。一人暮らしのアパートは引き上げたし、大学は休学した。カンボジアで1年住むための情報を探しても、ほとんどまともな情報はなかった。

自分の幾ばくかの貯金と、バックパックと買ったばかりのスーツケースでやってきたんだ。クメール語ができたわけでもないし、信頼できる身寄りがあるわけでもなかった。

こうして書いているとリスクばかりだ。けど、僕は損得勘定抜きに行きたいと思ったし、その準備をずっとしてきた。親の出す条件をことごとくクリアした。最後はほとんど意地になっていたかもしれない。

そんなことを考えながら、今の僕はカンボジア滞在を割礼のようなものなのだろうと結論付けた。

最後に

プロモの生徒、先生、KEAF-Japanの関係者、カンボジアに遊びに来てくれた今村くんと田原くん、ゼミの仲間、両親、祖父母、友人のみなさま、カンボジア滞在においてお世話になりました。ありがとうございました。

自分にできることを見つけながら、やっていきます。

(了)

2009/12/14

児玉裕史

